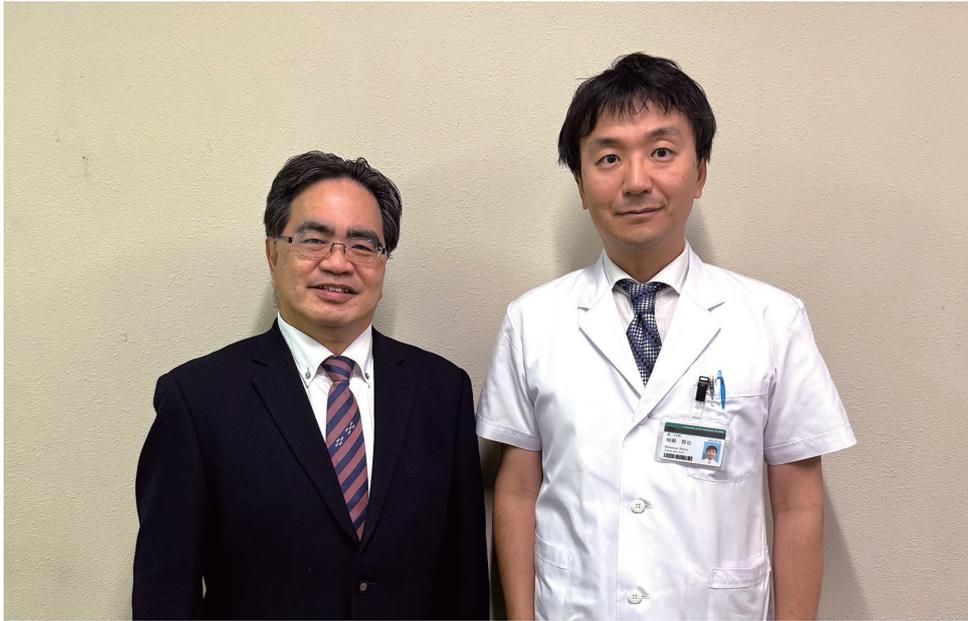


琉球大学病院第三内科 教授 楠瀬賢也 先生



○藏下先生 去年の2023年7月から教授に就任されております。大変遅ればせながらですが、教授ご就任おめでとうございます。

○楠瀬教授 ありがとうございます。

○藏下先生 今回、沖縄の地に赴任され、教授に就任されてのご感想と、今後の抱負をまずお聞かせ願えますでしょうか？

○楠瀬教授 インタビューありがとうございました。私がこの地に着任して以来の第一印象についてお話ししますが、この地の人々の温かさに非常に感動しました。徳島大学で長年教員を務めた後、去年の7月にこちらへ着任しました。沖縄との繋がりがほとんどない私に対しても、医局の先生方をはじめ、様々な関係者の

皆さんが温かく迎えてくれたことが印象深いです。着任してから9ヶ月が経ちますが、最初に関心したのは、第三内科と大学医局の全体像を理解することでした。新しい環境に馴染むには、その歴史やこれまでの成果、そして先生方の個性を把握することが重要だと考えたからです。

○藏下先生 先生が沖縄にいらして、今後の第三内科の講座運営、目指すところ、方針というのをお聞かせ願えますか。

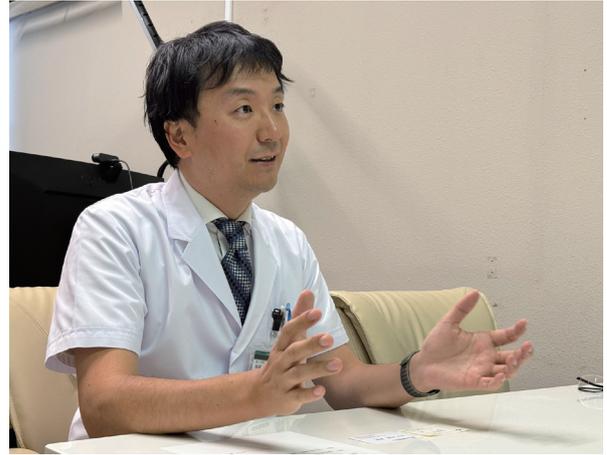
○楠瀬教授 第三内科は循環器、腎臓、神経という3つの専門分野を核として、相互の連携を深める歴史を持っています。私はこの連携をさらに強化し、発展させていくことを目指しています。着任してから感じたのは、第三内科が持つ高度な診療技術、細やかな教育、そして

先進的な研究成果を外部にしっかりと伝える「発信力」が不足している点です。優れた能力や成果を持ちながら、これらが外部に十分に認識されていないのは非常にもったいないと考えました。

この課題に対処するために、私は積極的な広報活動に取り組んでいます。例えば、ホームページの更新強化、琉球大学が月1回開催する学長懇談会での積極的な利用、プレスリリースの発行などを通じて、第三内科の活動を外部にアピールしています。着任以来、すでに3件のプレスリリースを発行し、1回の記者会見を行いました。これらの広報活動を通じて、第三内科がこれまでに成し遂げてきたこと、そしてこれから目指す方向性を広く社会に知ってもらうことが重要だと感じています。

将来を見据えた時、私たちの目指すべきは、日本、そして世界のトップレベルにある教育、研究、そして診療の実現です。特に診療分野においては、日本国内で最高水準とされる医療サービスを沖縄で提供することを目標としています。これを達成するために、琉球大学が主導する形で取り組みを進める必要があります。私たちの専門である循環器、腎臓、神経領域で、本土で可能な医療サービスを沖縄でも同等に提供できるようにすることが、診療面での私たちの大きな目標の一つです。沖縄県においても、国内トップレベルの医療を実現し、地域医療の質の向上を目指していきたいと考えています。

教育に関しても重要な目標があります。琉球大学は、世界的に見ても教育の質が高いと評価されていることを承知しています。実際に着任してみて、教育体制が非常に整っていることを感じました。しかし、教育は根本的に人と人との関係に基づいています。特に医学教育では、学生一人ひとりに対する個別の指導が非常に重要です。大規模な講義よりも、1対1や1対2のような少人数での教育が、医師としてのスキルや知識を身につける上で効果的です。この個別指導を成功させるには、教育者側にも高いスキルと適切な心構えが求められます。私たちは、



この点を強化し、琉球大学から世界中どこへ行っても通用する、質の高い医療従事者を育成することを目指します。具体的には、教育プログラムのさらなる充実や、教育者の研修・育成に力を入れ、学生個々のニーズに応じた教育を提供できるようにしていきたいと考えています。これにより、学生たちが最高レベルの医療知識と技術を身につけ、将来優れた医師として活躍できるようになることを願っています。

研究に関しては、私は臨床研究を得意としてきました。琉球大学において主任教授の立場を頂いた今、この立場でしかできない、より影響力のある研究に取り組みたいと考えています。これまで私は主に単一施設からのデータに基づく研究を行ってきましたが、これが私の研究手法の約8割を占めていました。そこから独自のアイデアでビッグジャーナルに論文を掲載することが、私の研究スタイルでした。しかし、今後は多施設の協力を得て、多施設コホートや洗練されたデータセットを用いることで、世界にインパクトを与えるような研究を行いたいと考えています。特に、沖縄が直面するへき地や離島といった医療環境の問題に焦点を当てた、問題解決型の臨床研究に興味があります。過去には既知の事象を追試する研究にも取り組んできましたが、新しい挑戦として、実験的なアプローチで未解決の問題に取り組むことで、具体的な解決策を見出す研究を進めていきたいです。

この取り組みは、県内の医療機関はもちろん、将来的には全国規模の多施設共同研究に発展させるべきだと考えています。まずは県内の医療従事者と協力し合い、具体的な問題解決に向けた研究を推進していくことを目指しています。このようにして、琉球大学が先導する形で、地域に根差した臨床研究を通じて、地域医療の課題解決に貢献していきたいと思えます。

○**藏下先生** 非常に期待が膨らむ話を聞かせていただきました。先生はアイデアマンでいらっしゃると思いますので、いろんな発想でいろんな研究を、ということはあると思うんですけど、何か新しいもの、琉大独特の研究を、という時に、沖縄ならではの研究ができるようなこの地の特色、あるいは解決に向けて取り組むべき課題など、先生が現時点で考えていらっしゃることはありますかでしょうか。

○**楠瀬教授** 沖縄が臨床研究に非常に適している理由として、人口の移動が少なく、個々の追跡がしやすい地域的特性が挙げられます。これは、第三内科の腎臓グループが世界的に影響のある研究を行っていたことから明らかです。私の専門である循環器に関しても、沖縄はユニークなコホート研究を行うのに理想的な場所です。日本における循環器系のコホート研究はまだ多くない中、沖縄特有の気候や食生活など、特色あるデータセットは、新たな医学的知見を提供する可能性を秘めています。

さらに、私は人工知能の研究を専門としており、離島や地理的に不利な場所でも適切なデータの収集と解析が可能になっている現代のデジタル技術の活用注目しています。この技術の進歩により、地理的なディスアドバンテージを克服し、効率的にデータを収集する時代になりました。この点においても、沖縄は独自の研究環境を提供し、大規模なデータ収集とその分析を可能にします。

この背景を踏まえ、私は沖縄での研究を通じて、新たな医学的仮説の検証と医療への応用を



目指しています。企業との連携を活かし、高度なデジタル技術を駆使して、視覚化された大規模データを収集し、これまでにない新しい医学的洞察を得ることが、私たちの研究の目標です。沖縄が持つ独特の環境を活かし、世界に貢献できる医学研究を展開していきたいと考えています。

○**藏下先生** 先生がおっしゃるように、沖縄はやはり地理的な問題で、これまでディスアドバンテージというところが多かったと思うんですけど、AIなどのいろんな技術が入ってきて、先生のお得意とする分野を使って、今までわかっていなかったこと、まだ解明されてないところが、逆に沖縄ならではのアドバンテージとして研究成果に繋がることを期待して聞いておりました。

○**楠瀬教授** レジストリーデータを常に最新の状態に更新し続ける必要性を強く感じています。特に、心不全治療の領域では、最近数年で治療薬が大きく進化しています。以前はベータブロッカーやRAS系阻害薬が主な治療薬でしたが、最近ではSGLT2インヒビターやARNIなどの新しい薬剤が登場し、治療の選択肢が広がっています。このような新しい薬剤を使用した治療の効果を評価するためのレジストリーデータは、現在日本ではほとんど存在しない状態です。多くの既存レジストリーは、SGLT2

インヒビターなどの新薬が導入される以前のデータをベースにしており、その効果を評価するためのデータが不足しています。新たなレジストリーデータの作成と更新により、心不全治療の進化をデータに基づいて評価し、将来の治療指針の確立に貢献できる可能性があると考えています。

○藏下先生 現時点で、循環器、腎臓、神経の中で特に力を入れている研究あるいは活動がありましたら教えてください。

○楠瀬教授 私たちのチームは、腎臓、神経、循環器の各分野でそれぞれ得意とする領域があります。私の方針は、まずこれらの強みをさらに伸ばし、次に改善が必要な部分に取り組むというものです。得意な領域を強化することで、自然と他の分野も引き上げられると考えています。

例えば、循環器分野では、弁膜症のカテーテル治療の技術が特に優れています。これは沖縄だけでなく全国的にも評価されており、この分野の研究や教育をさらに推進していきたいと思っています。この分野の研究は、比較的スムーズに進むでしょう。

腎臓分野では、生検による病理診断に長けています。これまでこの分野では多くの成果を上げてきましたが、私の専門であるイメージング技術との組み合わせで、新たな発見ができるかもしれません。

神経分野では、特に変性疾患と脳卒中の治療が重要です。琉球大学が新たに高度救急救命センターを設立するにあたり、脳卒中治療では神経内科の役割が不可欠です。脳外科だけではカバーできない部分があり、神経内科の体制が充実することで、沖縄における脳卒中治療の質がさらに向上すると期待しています。

これらの分野での強みを活かし、さらに発展させることで、全体としての医療の質を高めていくことが私たちの目標です。

○藏下先生 はい、わかりました。ありがとうございます。ちょっと話が変わりますが、第三内科は、今年創立40周年を迎えるということですね。私は、琉大学生時代に初代の柗山教授の教え子にあたりますので、何か非常に感慨深いものあるんですが、40周年を迎えるにあたって、先生の意気込み等がありましたらお聞かせ願えますか。



○楠瀬教授 私が赴任して2年目で40周年という節目を迎えることは、私にとって大変名誉なことです。過去40年間には3人の教授がそれぞれ顕著な業績を残されてきました。このような豊かな歴史の一部となり、過去の教授方の功績を引き継ぐことは、私にとって非常に意味深いものです。40周年記念は、これまでの3代の教授の成果を讃え、その業績を振り返る絶好の機会になるでしょう。この記念の時点で、私もこの節目を深く理解し、今後の方針とビジョンを示す良いタイミングだと感じています。

○藏下先生 ありがとうございます。臨床の方ですが、琉球大学医学部の使命として、離島、へき地における人材派遣というの大きな役割、期待になっていると思うのですが、離島へき地医療の支援ということに対してどうお考えでしょうか。

○楠瀬教授 沖縄の離島地域での医療提供は、困難な状況に直面しています。医師数の増加が追いつかず、主に県立病院などがなんとか支えている現状です。この課題を解決するためには、沖縄で医療人材を育成し、維持することが重要な使命です。特に、第三内科や内科全体、さらには琉球大学全体として、医師育成の中心となるべきです。私の着任以来、スタッフと共に、医局員を集め、質の高い教育を通じて地域医療を支えることを最優先の使命として位置づけています。

しかし、医療人材が不足している中で更に多くの業務をこなすためには、技術の力を借りる必要があります。具体的には、人工知能(AI)やその他の技術を活用し、医師が担う業務の一部を機械に代行させることで、より多くの症例を効率的に、かつ安全に処理できるシステムの構築が不可欠です。このようなシステムを導入することで、同じ人数のスタッフでも、より多くの時間を確保でき、その時間を自己研鑽や趣味など、個人の充実に使えるようになります。

この取り組みは、離島での医療提供を改善し、

医療従事者の働きやすさを向上させるための重要なステップです。AI技術を活用することで得られる時間を、医師自身の成長やライフスタイルの向上に役立てることができるため、これは単なる技術的進歩ではなく、医療従事者の生活品質の向上にも繋がります。

○藏下先生 国も、医療DXの導入を推進して、デジタルとかそれからAIとか、そういう方向へ舵を切ろうとしてる中ですので、先生の先を見越したそういうお考えは本当に素晴らしいと思います。一方で人材の確保という意味では、実際この琉大の医学部医学科学生も半数は女性ですので、やはりこれからは女性医師が生き生きと活躍できる環境というのがやはり人材確保にはどうしても必要になると思います。女性医師の活躍の場に関してお考えをお聞かせください。

○楠瀬教授 大学としても、教職員の中で女性の比率を高めるという重要な目標があります。これは国の方針に沿ったものであり、医療業界においても女性ドクターの比率が半数近くになっている現状を踏まえると、女性が働きやすい環境を整備することが極めて重要です。具体的には、パウダールームの設置や女性医師同士の交流を促進するためのエリアの設計など、女性医師に特化した施設の整備を考えています。新病院への移転を機に、このような女性専用のスペースを設ける計画です。

また、女性のキャリアパスは男性に比べて複雑な事情が絡むことが多いとされています。これまでのように先輩の模範に従ってキャリアを築くだけではなく、個々人の状況や事情に応じたキャリア相談が今後はますます重要になってきます。私たちは、個々のニーズに合わせたきめ細やかなサポートを提供することで、女性医師一人ひとりがそのポテンシャルを最大限に発揮できるような環境を作ることを目指しています。これにより、全ての医師が専門性を高め、充実したキャリアを築けるような医局を実現したいと考えています。

○**藏下先生** ありがとうございます。では、もうそろそろ後半になりますが、沖縄県医師会に対して、ご意見やご要望などありましたらお聞かせください。

○**楠瀬教授** プロジェクトベースのアプローチを通じて、沖縄県医師会や関連組織との連携を深め、共通の目標に向かって努力することの重要性を感じています。具体的な目標を設定し、課題に基づいたミーティングを行うことで、話し合いがスムーズに進み、より成果を出しやすくなります。沖縄県医師会という大きな組織と協力する際には、明確な枠組みやプロジェクトを立ち上げることが効果的だと考えています。これにより、保険医療の問題や地域医療の改善など、さまざまなテーマで成果を上げることができるでしょう。このような連携と協力によって、我々は一つの大きな成果を達成することが可能になります。私は、これらの活動を通じて、研究だけでなく地域医療の質の向上にも貢献したいと考えており、今後も県医師会の先生方との議論を重ね、実りあるプロジェクトを展開していきたいです。

○**藏下先生** ありがとうございます。最後になりますが、先生の日頃の健康法やご趣味、座右の銘をお聞かせ願えますか。

○**楠瀬教授** 健康を維持するために、朝のランニングを習慣にしています。天気が悪い日でも決めた日には走るようにしていて、これが私の健康法の一つです。また、昔からの剣道の習慣を活かし、筋トレ代わりに素振りを行っています。仕事においては、ストレスが体調に影響するため、宵越しの仕事を持たないよう心掛けています。これにより、仕事の効率も上がったと感じています。

趣味については、以前は読書やゲームに興じていましたが、忙しさのために最近はあまりできていません。ロールプレイングゲームはストーリーを追うのが好きでしたが、忙しいと途中で止まってしまうことが多くなりました。ゴルフに関しては、やりたいと思いつつもまだ始めていませんが、沖縄での長い滞在を機に挑戦したいと考えています。

座右の銘は、留学時にラボの先生から教わった「小さなものにこそ注意を払え」という言葉です。この言葉は、細部にまで注意を払うことの重要性を教えてくださいました。研究者としての姿勢や論文の細かい表現にも気を使うことで、信用される研究を行うことができると学びました。この経験は、私の研究者としての態度に大きな影響を与え、人としても大切な教訓となりました。



○藏下先生 いいお話ですね。ありがとうございました。

沖縄はもうだいぶ慣れましたか？。

○楠瀬教授 沖縄生活にはだいぶ慣れたものの、まだ梅雨を経験していないため、その時期が少し心配です。沖縄の冬の暖かさには慣れましたが、本州への帰省時の温暖差による体調の変化などもあります。今後、様々なプロジェクトを進めていく上で、その影響を慎重に考えながら計画を立てる必要があります、これは特に大きな課題となりそうです。以前は小さなグループやラボでの活動が中心でしたが、沖縄での仕事はより広範な影響を考慮する必要があるため、その点に注意を払っていきたいと思います。

○藏下先生 先生がおっしゃっていたように沖縄の人の人柄もありますし、これから徐々に先生のお仲間を増やして、先生の考えてることを成し遂げていただければと思います。本日は本当にありがとうございました。

インタビューアー：広報委員 藏下 要



P R O F I L E

- 2004年3月 筑波大学 医学専門学群 卒
- 2009年9月 徳島大学 大学院 医科学教育部 卒
- 2010年9月 徳島大学 循環器内科 助教
- 2011-2014年 Cleveland Clinic, Cleveland, Ohio, USA, Research Fellow.
- 2020年4月 徳島大学 循環器内科 講師
- 2023年7月 琉球大学医学研究科 循環器・腎臓・神経内科学講座 教授

